

ウェスタ

家庭と健康の女神。繁栄の美德、つまりプレイヤーが集めた貨幣と蓄えた品物によって示すものですが、これに報います。

ユピテル

ローマの主神であり、ローマという国家の守護者。建設した煉瓦以外の都市の数で示される、創建の美德に報います。

サトゥルヌス

種蒔きと農業の神。家を建てた属州の数によって示される、農耕の美德に報います。

メルクリウス

商取引と盗人の神。プレイヤーが産出する物品の種類によって示される、多様性の美德に報います。

マルス

戦神にして生育の保護者。プレイヤーが操る入植者の数によって示される、植民の美德に報います。

ミネルウァ

工芸と叡智と美術の女神。選択した分野で建てた家の数によって示される、熟練の美德に報います。

コンコルディア

調和の女神にしてローマ市民の団結の後援者。プレイヤーがこのゲームを平和的手段で終わらせたことによって示される、調和の美德に報います。

古代都市のいま

(帝国【インペリウム】面の都市を属州 I【ブリタニア】から属州 XII【アイギュプトス】まで順に)

イスカ・ドゥムノニオルム Isca Dumnoniorum	→ エクセター (イギリス, 人口 118,000)
ロンディニウム Londinium	→ ロンドン (イギリス, 人口 8,300,000)
ルーテティア Lutetia	→ パリ (フランス, 人口 12,000,000)
ブルティガラ Burdigala	→ ボルドー (フランス, 人口 1,100,000)
マッシリア Massilia	→ マルセイユ (フランス, 人口 1,600,000)
ブリガンティウム Brigantium	→ ア・コルーニャ (スペイン, 人口 246,000)
オリシッポ Olisipo	→ リスボン (ポルトガル, 人口 2,800,000)
ヴァレンティア Valentia	→ バレンシア (スペイン, 人口 1,700,000)
コロニア・アグリッピナ Colonia Agrippina	→ ケルン (ドイツ, 人口 1,010,000)
ウインドボナ Vindobona	→ ウィーン (オーストリー, 人口 2,400,000)
ノヴァリア Novaria	→ ノヴァーラ (イタリア, 人口 105,000)
アクイレイア Aquileia	→ アクイレイア (イタリア, 人口 3,500)
シラクサ Syracusae	→ シラクサ (イタリア, 人口 119,000)
ルサディール Rusadir	→ メリリャ (スペイン, 人口 73,000)
カルタゴ Carthago	→ カルタゴ (チュニジア, 人口 21,000)
ナポカ Napoca	→ クルジュ=ナポカ (ルーマニア, 人口 325,000)
シルミウム Sirmium	→ 遺跡 (セルビア)
トミス Tomis	→ コンスタンツァ (ルーマニア, 人口 284,000)
デュラキウム Dyrrhachium	→ ドゥラス (アルバニア, 人口 208,000)
アテナイ Athenae	→ アテネ (ギリシャ, 人口 4,000,000)
レプティス・マグナ Leptis Magna	→ 遺跡 (リビア)
キュレネ Cyrene	→ 遺跡 (リビア)
ビザンチウム Bycantium	→ イスタンブール (トルコ, 人口 13,900,000)
シノーペー Sinope	→ スィノプ (トルコ, 人口 39,000)
アッタリア Attalia	→ アンタルヤ (トルコ, 人口 1,042,000)
アンティオキア Antiochia	→ アンタキヤ (トルコ, 人口 217,000)
テュロス Tyros	→ ティルス (レバノン, 人口 135,000)
アレキサンドリア Alexandria	→ アレキサンドリア (エジプト, 人口 4,500,000)
メンフィス Memphis	→ 遺跡 (エジプト)
ペトラ Petra	→ 遺跡 (ヨルダン)

ローマの属州について

ゲーム盤上に示された属州は歴史的観点からは全てが本当に正しいものというわけではありません。というのは、ローマ帝国の行政区画はここに記したよりもさらに複雑なもので、さらには常に変化するものだったからです。ゲーム的観点から属州の数を 12 に絞る必要があり、ここにまとめた歴史情報はこれに応じたものです。この文章の英文編集を行ってくれた Mark W. Bigney に感謝を（著者の英語は拙いのです）。

I ブリタニア BRITANNIA

紀元前 55 から 54 年、ベルギー人の部族をブリテン諸島による補給から遮断するため、ユリウス・カエサルはブリタニアに軍を上陸させました。ゲルマン人との戦争における深い挫折の後、皇帝アウグストゥスは、ブリタニアを占拠するという自身の計画を当面中止しました。しかし西暦 43 年、ローマ人は再び上陸し、この地域を徐々に征服しはじめました。彼らはブリテンの部族間の内戦の恩恵を受け、諸部族を次々と打ち破っていきました。征服を確かなものとするために、彼らはブリタニア中に砦や軍事基地を建てました。西暦 59 年には、南西の主要部を巻き込んだ大蜂起がありましたが、ローマ人は最後にはこれを倒しました。結局、この地域の北側の境界線が確定するのは、西暦 84 年まで待つことになります。

ブリガントス人による別の蜂起の後、西暦 118 年、皇帝ハドリアヌスは北の国境を強化するため、後に彼の名で呼ばれることになる壁の建設を決定しました。この要塞は、東は現在のニューカッスルから西はカーライルまで約 130 キロに達し、17 もの城を備えていました。後の西暦 142 年になってさらに北に建てられたアントニウスの壁は、しかし 40 年後に放棄されたので、ブリタニア地域の安全はまた再び長きにわたりハドリアヌスの長城によって担保されることになりました。211 年にエブラカム（現在のヨーク）で死亡した皇帝セプティマスセウェルスは、さらにこの壁を強化しました。すでに一世紀の時点で、ローマの為政者の住居がカムロドゥヌム（コルチェスター）からロンドンニウム（ロンドン）にから移動しています。

ブリタニアは、小麦、牛、金、銀、毛皮、奴隷、優れた狩猟犬によって、ローマ人にとって重要な地となっていました。金鉱山がウェールズ、スコットランド、コーンウォールに位置していました。また、青銅を製造するために必要な銅と錫についても、かなりの採掘量がありました。

343 年に始まり、ブリタニアは徐々にサクソン、ピクト、スコット人の侵略の対象となっていきました。正規軍が帝国の別の拠点を保護するために次々とこの島から撤退し、人々は自らの兵力で自身を守るために戦わねばならなくなりました。ハドリアヌス壁は 400 年頃に放棄され、代わりに残りの居住地が要塞化されました。最後の正規軍は 410 年にブリタニアを去りました。その後、ピクト人、スコットランド人、そしてサクソン人の侵入に伴い、ローマ人の為政は段階的に衰えていきました。

形式上は、ローマ帝国はブリタニアを放棄したことはありません。時代を下って 540 年になっても、ビザンチン皇帝ユスティニアヌス一世はブリタニアを自らの帝国の一部であると主張しています。

II ガリア GALLIA

紀元前 125 年より、ローマはフランク族の住む地中海沿岸を、ローヌ川渓谷と共に征服しはじめました。これを請け負ったのがローマ司令ガイウス・ユリウス・カエサルです。彼は紀元前 58 年から 51 年にかけて、ガリア全域の征服を実施しました。ガリアの長ウエルキングトリクスは、最終的にアレシアの戦いで粉砕されます。新たな領土はライン川まで延伸され、従っていくつかのゲルマンの部族も組み込まれました。

平定の過程でローマの統治機構が導入され、ほどなくしてガロ・ローマ混成文化が生まれました。最初は現地のエリートだけがローマ市民適格とされ、これは彼らに協力を促すためでした。しかししばらくの後には、元老院にガロ・ローマ人を含めるのはごく一般的になりました。西暦 212 年、皇帝カラカラは帝国のすべての住民に、つまりガリア人にも同様に、ローマ市民権を付与しました。

この最初の経済的文化的全盛期は、3 世紀、帝国の危機の時によって終わりました。この属州は蛮族の侵略と内部抗争によって荒廃し、皇帝アウレリアヌスが統治を取り戻す西暦 260 年になるまでの間、ローマから事実上独立した状態になりました。

古代後期には、状況は再び落ち着きを取り戻します。300 年頃、多くの城が近代化され、ローマ皇帝の何人かは、ルテティア（パリ）、アウグスタ・トレウェロルム（トリアー）そしてウィーンに、時折居住することもありました。異教のカルトも農村地域で 5 世紀まで生き延びはしたものの、キリスト教の信仰が非常に速さで浸透していきました。特に 4 世紀には、何人かの皇帝がガリアに長期滞在し、古代文化は再びの黄金時代を迎えました。

続く大移動の時代は、ガリアの繁栄と平和を長きにわたって止めることとなります。406 年冬のライン渡河の後、ヴァンダル、アラン、ゴート、スエビ族の混成隊がガリアを荒らし始めました。5 世紀になると、フランク、ブルガンディと西ゴートはガリアに自らの領を設け、ローマ帝国の崩壊後には独立王国として振る舞いました。470 年、ローマの司令官パウルスは、サクソン人の侵略者との戦いで壁ちました。

487~486 年まで、ローマの軍事指導者の息子であるシアグリウスが北部では地位を保持していましたが、彼の領土も最後にはクロヴィス一世のフランク王国に接収されました。このフランク王国が、最終的にはガリアの全体を統治することになります。

III ヒスパニア HISPANIA

カルタゴが第一次ポエニ戦争によってシチリア、コルシカ島、サルデーニャ島を失った後、彼らはイベリア半島に拡がり、紀元前 218 年までにまで新たな力の基盤を確立しました。

紀元前 219 年、ローマ人と同盟していたイベリア人都市サグントゥムをハンニバルが攻撃し、第二次ポエニ戦争が始まりました。紀元前 218 年春、ハンニバルは約 10 万人と戦争用の象を集めてガリアとアルプスを越え、イタリアまで進軍しました。ヒスパニアを守るために残されたのは僅かな守備隊のみでした。

一年後、ローマ人はハンニバルの補給線を遮断するため、エンポリオンに 60 隻の船を上陸させます。彼らは最終的に紀元前 206 年、この地域からカルタゴ人を追い出して自らの帝国に統合しました。ヒスパニアは豊かな地域で、木材、朱、金、鉄、錫、鉛、陶磁、大理石、ワイン、オリーブ油を輸出していました。

大移動の時代、アラン人、スエビ人、ヴァンダル人から成るゲルマン部族による最初の大きな侵略が西暦 409 年に発生しました。ローマ人はこれに反応し、西暦 415 年、同盟する西ゴートに助力を請います。彼らは 418 年、自らの王国を設立していた南部ガリアのアクィテーヌに植民しました。456 年、西ゴートはヒスパニアを侵略します。これはローマが西ゴートに対してヒスパニアのスエビ人を討つよう要請したからでした。しかし 469 年、西ゴートはローマの支配に反逆し、472 年、ローマの支配下にあった最後の地域を奪取しました。これが、ヒスパニアにおけるローマ史の当面の終焉となりました。

551～552 年、ビザンチン皇帝ユスティニアヌスはスペイン南部に遠征隊を送りました。ゴート族間の内部紛争の恩恵を受け、彼はかなりの部分を征服することに成功し、この地域を「スパンニア」と名付けてカルタヘナを首都としました。西ゴート族は 625 年にカルタヘナを征服、イベリア半島におけるローマの存在はこれで完全に終わりました。

IV ゲルマニア GERMANIA

後に「ゲルマニア」と名付けられるこの地域におけるローマ軍とゲルマン民族間の最初の接触は、ユリウス・カエサルのガリア戦争中、紀元前 50 年頃に起こりました。紀元前 12 年に始まったドルススの行軍は、ローマ人を率いてライン川を超えて東へ、最終的にはゲルマニクスの指揮のもと遙かエルベ川まで進みました。しかし西暦 9 年、トイトブルク森の戦いでローマ軍は大敗し、3 軍団を失います。

ゲルマン人の強い抵抗のため、

ライン川越えの遠征は西暦 16 年に放棄されました。

ローマの歴史家タキトゥスは、ゲルマン人の清い生活態度と実直な性格、戦闘時の勇気と自由への感覚を賞賛しました。ただし彼らの鈍重さ、サイコロ賭博中毒と過度の飲酒の習慣については批判しています。

二世紀には、要塞化された境界線（リメス）の拡張により、この属州はライン川の東側、相当に拡大しました。ゲルマニアの重要性は、その大きさや経済基盤というよりも、帝国の境界に位置して脅かされているという事実にかけていました。したがってゲルマニアは軍によって特色づけられていました。上ゲルマニア属州のローマ軍司令官は短期間に自らの兵をイタリアに動かすことができたので、強い軍事的影響力を持っていました。西暦 97 年にトラヤヌスが容易にローマ皇帝の座につけたのは、彼がこの時期にゲルマニアの兵を指揮していたためだと考えられています。

西暦 260～280 年頃、ローマはライン東部領域とリメス要塞から撤退せざるをえなくなりました。軍事境界線はライン川とドナウ川まで後退しました。

406 年冬、大移動期の一環としてのゲルマンの侵攻はライン川を越え、いくつかのローマの都市が略奪されました。五世紀初頭（411～435 年）、ブルガンディ軍はローマ正規軍と共にこの地域を支配下に置きましたが、最終的に 436 年に反乱を起こし、酷く打ち負かされました。455 年以降、最初はアラマン部族同盟、後にメロヴィング朝フランクが、ライン川の治世においてローマに続くこととなります。クロヴィス一世が 482 年に彼の父の王座を継いだとき、彼は正式にはゲルマニア・プリマの管理者に任命されたのでした。ゲルマニア・プリマは後にはフランクの王領となります。カール大帝ですら教皇レオ三世によって「ゲルマン国家の神聖ローマ帝国」の皇帝として戴冠されたのであり、つまりローマ帝国の伝統を受け継ぐことを望んでいたのです。

V イタリア ITALIA

紀元前 4 世紀から、イタリア中央部で起こったいくつかの戦争の中、ローマは広範な同名のシステムを創りだしました。戦略的に重要な場所に、新たな植民地が設立されました。これらの時代からローマは強力な軍隊を持つ強力な国家として登場し、世界の大国として興隆するための助走を行っていました。

危険な相手は、初期には北のエトルリア文明であり、後にはポー渓谷のケルト人と南のギリシャ植民地でした。このギリシャの都市国家が征服されるのは

紀元前 275 年頃、ピュロスの指揮の下のことでした。ピュロスは戦いには勝ったのですが、軍の壊滅的な損失を被りました。そしてこれによってローマはカルタゴと衝突。この衝突は血塗られた三度のポエニ戦争によって最終的解決を見ることとなります。第一次ポエニ戦争（紀元前 264～241 年）において、カルタゴはシチリア、サルデーニャ、コルシカ島から追い出されます。第二次ポエニ戦争（紀元前 218～201 年）では、カルタゴのハンニバル將軍はアルプスを越えてイタリア半島を侵略し、ローマの制圧にほとんど成功するところまで行きました。しかしローマの司令官スキピオは紀元前 204 年にアフリカに航海し、紀元前 202 年のザマの戦いにおいてハンニバルを破り自らの国を守りました。カルタゴはアフリカの外に持っていた全ての領土と艦隊を失いました。第三次ポエニ戦争では紀元前 146 年カルタゴがついに破壊され、消されました。

しかし、海外でのローマの成功にもかかわらず、イタリア内の秩序は危機に瀕していました。軍事作戦の勝利により、より多くの貨幣と奴隷が流入しました。豊かな市民は莫大な面積の土地を取得し、中産階級はもはや経済的に競争することができなくなりました。これによって発生したのは広範囲に及ぶ貧困、農村の脱出、そして人々の深刻な不満でした。政治・経済改革のための試みはあったのですが、何事についても変革に賛意を示そうとしない土地保有者や保守的な元老院のせいで、試みは全て失敗しました。緊張は長年にわ

たって残り、結果、流血の内戦の時代を迎えます。カエサルが殺された紀元前 44 年、共和政ローマは終わり、帝政に置き換えられます。

続く帝政時代のイタリアは平和を保ち、高水準の繁栄に浴しました。古代後期、ローマはパンとゲームに淫する、百万をはるかに超える数の住民を抱えていました。しかし、大移動の時代が、イタリアをしたたかに襲います。それまで何百年も攻撃されたことのなかったローマは、410 年に西ゴートによって、そして再び 455 年にヴァンダル族によって略奪されました。常時の略奪と侵略者間での内戦、そしてペストがイタリアの古代文化と経済を破壊します。中世には、ローマの人口は 20,000 人以下にまで減少しました。

VI モーリタニア MAVRETANIA

カルタゴが紀元前 146 年に敗れた後、ローマは北アフリカで小植民地を設立しました。皇帝アウグストゥスの治世下で、ローマの文化と統治はアトラス山脈の東から西へすばやく広がり、大規模な都市化の時代が始まりました。アウグストゥスはそして、新カルタゴも消された都市の廃墟の上に設立します。この都市は繁栄を続け、人口 25 万に達しました。一世紀から四世紀の間、古代の巨大都市としてローマの生存は、アフリカからの穀物やオリーブの供給に依存していました。古代の気候は今日よりはるかに湿度が高く、現在は砂漠となっている地域において居住地の繁栄を促しました。北アフリカの道路網は、帝国全土の中でも最高度に発達したものでした。重要な農産物とは別に、この属州は深紅や貴重な木材も提供しました。

この属州においては、ローマ人の軍事的プレゼンスは、一般的に低いものでした。後背地では遊牧民の衝突が時おり発生していましたが、都市はほとんど影響を受けませんでした。主に地元民から集めた 15000 人の補助軍だけが駐留していました。全体的に見ると、北アフリカ地方の防衛は帝国北部の属州の防衛より、ずっと簡単に組織できるものでした。はるかに小さいブリタニアだけでも、平和を維持するために 3 軍団を必要としていました。

大移動の時代、ヴァンダル族はイベリア半島を経由し、429 年春にモーリタニアに入りました。彼らには土地が与えられましたが、彼らは後にこの条約を破って 439 年にカルタゴを征服し、相当量の海軍力についても捕獲しました。この艦隊の助力を得て、彼らはシチリア、サルデーニャ、およびバレアレス諸島を征服し始めました。455 年、彼らの王ガイセリックはローマさえも略奪し、「破壊行為 Vandalism」の語の由来となります。7 世紀には、アラブの拡大により、この属州全体がイスラムの支配下におかれました。

VII ダキア DACIA

西暦 85~86 年の冬、ダキアの戦士の大群がドナウ川を渡り、ローマ人に完全な不意打ちを食らわせました。彼らの強奪や略奪を止めるのは難しいことでした。結果、ローマ皇帝ドミティアヌスはローマの領土から再び追い出すのみならず、討伐を実施することを決定しました。この頑強な敵との戦いは西暦 86 年全体にわたって続きました。長く血なまぐさい戦争の後、106 年になってついに、皇帝トラヤヌスはダキア人を完全に制圧しました。この戦争はローマに対し、銀 331 トン、金 165 トンの恵みをもたらしました。これは大変に歓迎され、中でもローマでトラヤヌスのフォルムを建設する助けとなりました。117~118 年、蛮族からの攻撃を受けている期間において、ローマ人はこの属州の放棄を検討しましたが、ダキアは戦略的に極めて重要であり、豊富な鉱物資源の源でもあったので、放棄しないことを決定しました。無数の鉱山が、ローマ人に金、銀、鉛、銅、鉄、大理石、そして塩を供給しました。林業や農業の繁栄も大変に重要で、木材、羊毛、家畜、毛皮などがもたらされました。

属州ダキアは主に現在のルーマニアから構成されていますが、再編成後にはドナウ川南の領域も含まれるようになりました。南部の例外を除き、どの国境線も主に蛮族に囲まれていました。長い期間の平和の後、強力な蛮族の大群が 235 年に集結してこの属州を攻撃しました。これ以降、ダキアは常時不安と戦いの地となり、駐留するローマ軍は推計約 3 万人にも達しました。ついに皇帝アウレリアヌスは 271 年、自らの軍と統治をドナウ川の南にまで撤退させました。彼の意図は緩衝地帯を作ること、実際ゴート族やその他ゲルマン諸部族は、この地域を掌握して支配下に置くために数十年を必要としました。こうして、さらなる蛮族に対する一定の防御が、暫くの間は保たれることになりました。

今日でもローマ時代の遺産はロマンス語派に属するルーマニア語の中に生きています。また、属州ダキアの名前も、自動車の国際的に有名なブランドとして現存しています（「ダチア」、2013 年現在ルノー傘下）。

VIII ヘラス HELLAS

「ヘラス」はギリシャ人による自国の自称であり、ローマ人はここを属州アカエアと呼びました。この地域は、紀元前 146 年にローマ人のものとなり、最初は属州マケドニアの一部として組み込まれました。皇帝アウグストゥスの治世下、アカエアは独立した元老院属州として、ギリシャ諸島の大部分を占めるギリシャ本土を含む形で構成されました。アテナエやスパルタなどの一部の都市は、自由都市としての正式な地位を維持できました。

ギリシャの人々はローマの税と借地制度の下で苦しみました。大量の土地開発がギリシャの農業構造の特性を大きく変えました。この属州はワインを主に北部ペロポネソスから、蜂蜜とオリーブオイルをアッティカから、テッサリアといくつかの島から大理石を輸出しました。職人技芸による製品はアテネを中心に製造されました。

非常に重要な輸出品として、教育が挙げられます。古代ギリシャはよく欧州のゆりかごとして描かれますが、これは特に哲学、自然科学、歴史学、文学の分野における文明への貢献によるものです。多くのローマ人はヘラスの古の地を訪れ、この属州にある種の野外博物館と考えていました。さらに、アテネは学園、哲学の講義の場の礎となり、ケケロのようなローマ人が哲学、修辞学、言語学の講義のために訪れました。ギリシャの奴隷はローマ人から強い敬意をもって迎えられ、高い教育水準により教師や医師などの職で働きました。古代オリピックの呼び物はまだ存在しており、皇帝ネロすら参加していました。

西暦 395 年のローマ帝国分離において、アカエアは後にビザンチン帝国として知られることになる東ローマに属することになりました。

ビザンチンの「テマ・ヘラス」は、元ローマの属州アカエアと概ね一致するものでした。ギリシャの文化的影響は強固に残り、ギリシャは東ローマ帝国内で、脅かされることのない公用語となりました。アテネの哲学アカデミーは 531 年、この都市の衰退を加速させたユスティニアヌス一世の勅令により、閉鎖されました。

IX リビア LYBIA

西のトリポリタニアと東のキレナイカは、紀元前一世紀にローマに整備されました。リビア南部のガラムンテスのみが、自らベルベル人の王国を持ち、独立を保っていました。ローマの支配は貿易を促進しました。特に、海賊行為は効果的に抑えられました。これらの都市は豊かな農業の恩恵を受けて地中海沿岸じゅうに新たな市場を得ることになり、またサヘル地帯のキャラバン貿易によって、象牙、金、アフリカ人奴隷が輸入されました。この属州自体も、ワイン、オリーブオイル、小麦、そして馬を輸出しました。皇帝セプティセウェルス（190～211 年）は、彼の誕生の都市レプティス・マグナやその他の都市に、豪華な建物を備えました。これにより建設産業が促進され、地元経済にとって長く続く刺激となりました。

二世紀の終わり、ローマは好戦的なベルベルの部族による絶え間ない脅威に対して、砂漠の城を連ねて南の境を防御することを決めました。リメス・トリポリタヌスは 197～201 年に建てられ、以来、拡張を続けさらに要塞化されていきました。

395 年のローマ帝国分割後、リビアは東ローマ帝国の属州となりました。五世紀の変わり目には、砂漠の部族の侵入を受けました。ユスティニアヌスは防衛線の回復と強化を試みましたが、この方策の成功は短期的なものではありませんでした。643 年、イスラムの拡張によってキレナイカが征服され、属州は消滅しました。

X アジア ASIA

ペルガモンは紀元前 133 年、遺贈契約によってローマの属州となりました。残りのセレウコス帝国についても同法が適用され、最終的に紀元前 63 年に崩壊、ローマ帝国と東にあるパルティア帝国の間で分割されました。東へのローマの展開は、何世紀にもわたって、ローマと並ぶ強大な帝国だったパルティアによって留められました。

とりわけ内に抱えた多くの都市の恩恵により、アジアは豊かで名高い属州でした。エフェソスは、属州内において支配的な地位を得るべく、主にペルガモンやスミルナと争いました。都市には主にギリシャ人が入植し、一方で農村部はギリシャ以前の人々が入っていました。皇帝アウグストゥスの下の「パクスロマーナ」は、二世紀まで続く黄金時代の到来を告げるものでした。皇帝トラヤヌスとハドリアヌスがアジアを訪れました。早くも西暦 50 年には、キリスト教信仰が栄え、いくつかの司教領が設立されました。最初のキリスト教会会議は、アジアでも開催されました。

4 世紀、コンスタンチノーブル（旧ビザンチウム）は、東ローマ帝国の首都となりました。こうして小アジアはさらなる政治的中枢となりました。7 世紀、アラブ人によるエジプト、パレスチナ、シリアの征服後、アジアはビザンチン帝国の主領地となりました。14 世紀の中盤には、ビザンチン帝国のほとんどの都市はトルコ人に奪われていました。ついに 1453 年、コンスタンチノーブルすらもは彼らによって征服されました。

XI シリア SYRIA

将軍ポンペイウスがセレウコス帝国を解体した後、ローマ属州シリアが西暦 63 年に設立されました。現在のシリアの国土は、この旧ローマ帝国の属州よりもやや小さいものです。

シリアの強大な統治者は、属州の州都であり帝国全体でも最も大きい都市のひとつであった、アンティオキアに居住しました。加えて、大きな軍事力がこの地域に駐屯し、東の境を危険なパルティアの脅威から守っていました。シリアはオリーブオイル、ワイン、シダー材、紫色の布、ガラス製品、象牙で飾られた小家具などのものを生産していました。またシリアは、中国から続くシルクロードの終点であり、絹を中国と、香辛料をインドと取引していました。

ユダヤ、サマリア、およびエドムを支配していたヘロデ・アルケラオスは、西暦 6 年、皇帝アウグストゥスによって追放されました。彼の王国はいまや帝国の一部となりました。ユダヤ人の大反乱の後、この地域は再編成され、ハドリアヌスの治世下でシリアに組み込まれてシリア＝パレスチナと呼ばれるようになります。

ササン朝ペルシャ帝国からの侵略を受け続けながらも、この地域は六世紀半ばまで栄え、（エジプトを除けば）帝国において最も重要な地域でした。アラブの拡大により、7 世紀に属州シリアは彼らに取り戻されました。

XII アイギュプトス AEGYPTUS

ローマとエジプトの間の友好関係が起源にあります。飢饉がイタリアで広まっていた第二次ポエニ戦争中、エジプト王プトレマイオス四世は紀元前 210 年に飢饉救済として大量のトウモロコシを送りました。ナイル川の王国の重要性をローマ人が認識したのはこの時です。

カエサル時代、ローマ帝国は、エジプトにおける強い政治的影響力の確保を試みました。ローマは王位後継紛争に介入し、追放されていたプトレマイオス十二世を再びその座につけました。この時から、ローマ軍がナイル川に駐留しました。カエサルとクレオパトラの間のロマンスには政治的な動機も確実にあったのです。紀元前 44 年のカエサル殺害後、クレオパトラの心をとらえたのはマルクス・アントニウスでした。彼女の助けを借りて、彼は後に皇帝アウグストゥスとなる彼のライバル、オクタウィウスと戦いました。紀元前 31 年、クレオパトラとアントニウスはローマからエジプトまで敗走しましたが、追手に対するあらゆる軍事的抵抗は無駄であることが示され、両者とも自決しました。紀元前 30 年、エジプトはついにローマ帝国の属州として組み込まれることになりました。

他の属州と比較して、エジプトはローマ帝国の穀倉地帯として特別な役割を果たしました。エジプトは単独で、都市ローマに毎年穀物 15 万トンを出荷しました。ローマ皇帝がファラオの役割を演じるカルトを除いては、プトレマイオス朝の君主制の伝統は続きませんでした。2 世紀のはじめ、エジプトはユダヤ人民による大規模な反乱を経験し、これは西暦 117 年、エジプトにおけるユダヤ人の生を消し去る結果に終わります。395 年のローマ帝国分割後、エジプトは東ローマ帝国に属することになりました。640 年以降、エジプトはアラブ拡張における目標地となり、642 年、アレキサンドリア陥落によりこの地域全体がイスラム教に下ることになります。